

日本英文学会北海道支部 第 61 回大会プログラム

日時：平成 28 年 10 月 29 日（土）

会場：北海道教育大学旭川校 共通教育棟（P 棟）

（旭川市北門町 9 丁目）

〈会場アクセス・地図〉

- ・JR「旭川駅」から、旭川電気軌道バス「5番旭町・春光線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分
- ・JR「旭川駅」から、旭川電気軌道バス「14番旭町線」で15分、バス停「旭町2条10丁目」下車、徒歩5分
- ・JR「旭川駅」から、旭川電気軌道バス「24番新橋・北門線」で15分、バス停「北門9丁目」下車、徒歩5分
- ・JR「旭川駅」から、タクシー利用で15分、片道¥1,250程度



〈懇親会のご案内〉

日時：10月29日（土） 18:30～20:30

場所：Beer & Restaurant MORROW'S（旭川市2条通8-2013-1）

会費：一般5,000円、学生2,500円

*懇親会は旭川駅にほど近い場所で行います。札幌行の特急電車は20:45発（スーパー宗谷4号）、21:05発（オホーツク8号）、22:00発（スーパーカムイ46号、最終電車）があります。

*懇親会参加ご希望の方は、9月25日（日）までに支部ホームページ（<http://www.elsj.org/hokkaido/>）よりお申し込みください。ご不明な点がございましたら、事務局（Eメール：hokkaido@elsj.org）までお問い合わせください。

*昼食につきましては大学そばにコンビニエンスストア、ラーメン店等がございます。また、当日朝、受付にてお弁当のご予約を承ります。

*書籍展示 共通教育棟（P棟）1階ホール

*発表者・参加者控室 P102教室（茶菓の用意があります）

日本英文学会北海道支部第61回大会プログラム

日時：平成28年10月29日（土）

会場：北海道教育大学旭川校 共通教育棟（P棟）

（旭川市北門町9丁目）

受付開始（10:00～）（共通教育棟（P棟）1階ホール）

開会式（10:20～）（P101教室）

開会の辞

日本英文学会北海道支部支部長

瀬名波 栄 潤

拡大理事会（11:50～12:50）（P102教室）

〈**文学部門**〉（P101教室）

招聘発表（10:30～11:05）

司会 北海道教育大学札幌校

本 堂 知 彦

ユダヤ商人バラバスが奨める「マカバイ記」

わずか一言から『マルタ島のユダヤ人』の中で辿れること

北海道大学名誉教授

竹 本 幸 博

研究発表（11:05～11:40、13:00～14:10）

1.（11:05～）

司会 北海道医療大学

鎌 田 禎 子

Charles W. Chesnutt の “The Wife of His Youth” における過去の英文学

北海道大学大学院

宮 澤 優 樹

2.（13:00～）

司会 名寄市立大学

小古間 甚 一

隠された財宝への海図

Herman Melville “I and My Chimney” が描く「秘密」へ至る方法論

北海道大学大学院

鈴 木 一 生

3.（13:35～）

司会 旭川工業高等専門学校

本 荘 忠 大

The Great Gatsby における階級と場所

北海道教育大学旭川校大学院

安 田 真

シンポジウム（14:20～16:50）

多面体としてのシェイクスピア

司会・講師 北海道教育大学函館校

星 野 立 子

講師 北海道大学

宮 下 弥 生

講師 早稲田大学

冬 木 ひろみ

〈語学部門〉 (P103 教室)

招聘発表 (11:00~11:35)

北海道方言「ラサル」の上昇動詞分析
再構成による統一のアプローチ

司会 藤女子大学 對馬 康博

北海道大学 大野 公裕

特別講演 (13:00~14:00)

ことばの研究と植物
生物学的見地の導入

司会 北海道大学 奥 聡

大阪教育大学 松本 マスミ

シンポジウム (14:20~16:50)

英語の変化と生成文法理論

司会・講師 北海道教育大学札幌校 茨木 正志郎
講師 藤田保健衛生大学 久米 祐介
講師 筑波大学 山村 崇斗

総会・閉会式 (17:00~) (P101 教室)

閉会の辞

日本英文学会北海道支部副支部長 本堂 知彦

懇親会 (18:30~20:30)

場所：Beer & Restaurant MORROW'S (旭川市2条通 8-2013-1)

〈発表要旨〉

〈文学部門：招聘発表〉

ユダヤ商人バラバスが奨める「マカバイ記」
わずか一言から『マルタ島のユダヤ人』の中で辿れること

竹本 幸博（北海道大学名誉教授）

クリストファー・マーロウ作『マルタ島のユダヤ人』の中で反ユダヤの民族差別が最も高まる瞬間に、当のバラバスが「マカバイ記」を口にする。異教徒の圧政に立ち向かったユダヤ人の物語である聖書外典「マカバイ記」はバラバスの抵抗のよりどころであった。「マカバイ記」からは単に異教徒による迫害が同じだけに留まらず、棄教よりは死をという宗教メッセージも取り入れられている。また、悪漢バラバスが師と仰ぐマキャベリの現実主義も「マカバイ記」の特徴の一つであり、その類似はマキャベリとマカバイの発音（マキャビー）という音の近接にも暗示されている。

迫害に立ち上がるバラバスは「マカバイ記」の英雄マカバイの姿に重なる一方、悪漢のバラバスの末期と「マカバイ記」の信仰に殉じて処刑される人々の姿も、マーロウらしい筆の一ひねりで重なって見える。

〈文学部門：研究発表〉

Charles W. Chesnutt の “The Wife of His Youth” における過去の英文学

宮澤 優樹（北海道大学大学院）

人種問題を明確な主題としたアメリカの作家 Charles W. Chesnutt (1858-1932) は、登場人物が自分の人種的ルーツと時を経て再会するというプロットの作品を多く残した。このような物語の枠組みを選択したことは、人種という自らの起源が問題となる主題を扱う作家として、ごく自然な判断であるといえよう。だが Chesnutt の作品において、長い時間の経過が喚起している問題は、人種に関するものに限られるわけではない。短編集 *The Wife of His Youth and Other Stories of Color Line* (1899) に収められたいくつかの作品において、登場人物は過去の文学作品と向き合うことを強いられる。本発表は、古典的な作品の存在が殊に強調されている表題作を中心に、古典文学が Chesnutt 作品のなかで果たしている役割を論じる。Chesnutt 作品とその内部に描かれる過去の作品との相互的な関係を指摘することにより、時間の問題が先行作品と作家自身の関係をも問うものであること、Chesnutt が小説についてメタ的な意識を伴う執筆活動を行っていたことを明らかにしたい。

隠された財宝への海図

Herman Melville “I and My Chimney” が描く「秘密」へ至る方法論

鈴木 一生（北海道大学大学院）

Herman Melville の “I and My Chimney” (1856) は、1853 年から 1856 年のあいだに雑誌向けに書

かれた一連の短篇作品のなかでも、際立って寓意的な物語のひとつであると評されてきた。語り手の家に鎮座する古く巨大な煙突は、あたかも *Moby-Dick* (1851) における白鯨の存在が意味の決定から逃れ続けるようにして寓意の読み取りを頑なに拒み、それゆえ読者たちは巨大な煙突という事実を前に途方に暮れてしまうのだった。また作品中では煙突の内部に秘密の納戸が隠されていることが示唆され、読者は秘密の納戸やそこに隠されているであろう財宝が明らかにされることを期待しながら読み進めるのだが、結局謎は解かれることなく結末が訪れる。つまり本作品は謎それ自体の正体を描くのではなく、「謎への辿り着き方」を描いているのだ。この小説を読むことで、私たちは捉え難い何ものかの姿かたちを知ることはできないかもしれないが、そこへ至るための道筋を知ることはできるかもしれない。

The Great Gatsby における階級と場所

安田 真 (北海道教育大学旭川校大学院)

本発表では、F. Scott Fitzgerald (1896-1940) の *The Great Gatsby* (1925) について、「場所」という観点に注目することによって、作品内に潜む階級の問題を考察する。Alberto Lena は、当時の経済発展するアメリカの中で、上流階級が衰退し始めていたと述べている。上流階級の衰退によって、社会階級が曖昧なものになったように見えるが、はたしてそうであろうか。物語の中では、プラザホテルや灰の谷のように、異なった階級に属する人達が社会生活を共にする場所が描かれている。これらの場所を当時の歴史背景に沿って考察することによって、作品に登場する場所と登場人物が属する階級の関係性を解明する。そして、階級の差が曖昧に思われるようであっても、階級と階級の間には越えることができない壁が存在していることを明らかにしたい。

〈文学部門：シンポジウム〉

多面体としてのシェイクスピア

司会・講師 星野 立子 (北海道教育大学函館校)
講師 宮下 弥生 (北海道大学)
講師 冬木ひろみ (早稲田大学)

今年シェイクスピア没後 400 年にあたる。その節目の年の 5 月に、シェイクスピア等の演出で日本の演劇界を牽引した蜷川幸雄氏が亡くなった。蜷川氏が自ら育てた若い俳優達を「勉強、勉強、勉強」と激励し、同時に、生前最後のインタビューで、自分について「いい演出家になりたいんだよ、もっと」と語っている姿には、未来を見据えた、演劇芸術への厚い信頼と熱い思いが見て取れる。

今回のシンポジウムでは、「多面体としてのシェイクスピア」をテーマに、『冬物語』におけるハーマイオニの蘇りについて、材源との比較によりその仕組みを明らかにし、また、シェイクスピアの笑いについて、チャーホフと井上ひさしという劇作家を通して考察し、そして、シェイクスピアの、言語による視覚的表象の手法の特質性について考察していく。

没後 400 年を迎えた「万の心を持つ」シェイクスピアの多面性を再認識できる場となれば幸いである。

ハーマイオニの蘇り

宮下 弥生

『冬物語』が材源の『バンドスト』と決定的に異なる点は、最後にハーマイオニが蘇ることである。材源とほぼ同じようなプロットをたどりながらも、ティリヤードの言うロマンス劇の特徴、「繁栄」「崩壊」「再生」の過程を作中にどのように作り上げているのか、その仕組みを論じたい。

劇の最後でポーライナが明らかにするまで、ハーマイオニが生きていたことは観客には隠されているが、劇冒頭から一貫してハーマイオニの蘇りを可能にする仕掛けが組み込まれている。レオンティーズの嫉妬、材源には存在しない登場人物（ポーライナ、カミロー、アンティゴナス）の働き、また、「再生」の過程を作り出すフロリゼルとパーディタのプロットに着目したい。

シェイクスピアと笑いの妙趣

チャーホフと井上ひさしを通して見えるもの

星野 立子

チャーホフも井上ひさしも「笑い」に非常にこだわった劇作家である。チャーホフはシェイクスピアから多大な影響を受け、井上ひさしも、シェイクスピア、そしてチャーホフをこよなく愛した。

チャーホフは元々ヴォードヴィル（笑劇）に強い関心を有し、シェイクスピアなどから刺激を受け、劇作を始めた。「チャーホフのシェイクスピア劇」と呼ばれる『かもめ』をはじめ、台詞を含めて登場人物の性格や劇作法にシェイクスピアの影響が認められる。なかでも、喜劇的精神はこの二人の劇作家に通底している。

一方、「笑いは人間が作るしかない」と語る井上ひさしは、「シェイクスピアの通俗性を見本市」と口上で表される不条理喜劇『天保十二年のシェイクスピア』を書き、そこでは、バフチンがシェイクスピアの特徴として挙げた「カーニヴァルのパトス」が展開されている。

本発表では、シェイクスピアと笑いの妙趣について、チャーホフと井上ひさしの喜劇的精神を通して考察する。

シェイクスピアの視覚的表象をめぐって

冬木ひろみ

シェイクスピアの劇は基本的には「聞く」劇だと考えられている。実際、シェイクスピアの blank verse の手法、リズム、前後の言葉の選び方は比類なきものと言える。しかしながらその一方で、舞台芸術であることの証のように、表象的言語・場面も数多く挿入されている。例えば、ガートルードが語るオフィーリア水死の場面や『シンベリン』のイノージェンの寝室の場面は、言葉が視覚的場面を作り出す代表的なものと言えるであろう。さらには『冬物語』の彫像の場面などは逆に言語を圧縮し、絵画的アナモルフォーズを実験的に試みているようにも見える。

本発表では、シェイクスピアのエクフラシスとも言える言語による視覚的表象の手法の特異性を、幾つかの劇の場面を例示しつつ明らかにしてゆくとともに、可能であればさらに、シェイクスピアの視覚的表象の手法が初期から後期へと変化してゆく過程についても考察できたらと思っている。

〈語学部門：招聘発表〉

北海道方言「ラサル」の上昇動詞分析
再構成による統一のアプローチ

大野 公裕（北海道大学）

北海道方言に見られるいわゆる自発の助動詞「ラサル (-rasar)」は、「御飯が炊かされた（＝御飯が炊けた）」のような例に対しては、他動詞を自動詞化する「逆使役化接辞」としてしばしば分析されてきたが、この分析は「つい、あいつの悪口 {が／を} 言わされた（＝言ってしまった）」のようなもう一方の用法と統一した説明ができないなどの問題があった。

本発表では、「ラサル」は同じ北海道方言に見られる使役動詞「ラセ (-rase)」と使役交替のペアをなす非対格動詞であり、補部としてある種の動詞句をとる上昇動詞であることを論じる。さらに、ラサル構文の上記2つの主要な用法は、「ラサル」の動詞句補部が再構成 (restructuring) を随意的に受けると仮定することで統一して説明できることを示す。

このように「ラサル」を非対格使役動詞としてとらえることで、従来から観察されてきたラサル構文のいくつかの意味特徴に対しても合理的な説明を与えることが可能になる。

〈語学部門：特別講演〉

ことばの研究と植物
生物学的見地の導入

松本マスミ（大阪教育大学）

植物は生物であるが、言語表現では、しばしば生物でないような扱いを受けることがある。その理由のひとつとして、同じく生物であるヒトが持つ「意志」や「感情」が植物にはないことがあげられる。Germinate, sprout, grow, flower, bloom のような英語の園芸書でよく見られる自動詞は、植物が「内発的な力」によって自分自身を変化させることを述べる動詞であり、スル動詞とナル動詞の特徴を兼ね備えているが、「意志」を行使しないというのが典型的なスル動詞との相違点である。また、植物の「固着性」「可塑性」という生物学的特徴は、言語学の「移動」「変化」の概念にそれぞれ対応している。

本発表では、植物とヒトの言語学的・生物学的特徴にもとづいて、植物についての日本語と英語の表現を形態・統語・意味の側面から考察することにより、植物とヒトとことばの関係を明らかにしていきたい。

〈語学部門：シンポジウム〉

英語の変化と生成文法理論

司会・講師 茨木正志郎（北海道教育大学）
講師 久米 祐介（藤田保健衛生大学）
講師 山村 崇斗（筑波大学）

近年、生成文法理論を用いた言語変化の研究が盛んになり、その目的は、言語変化の要因とメカニズムを探ることである。当該分野の先駆的研究に Roberts and Roussou (2003) があるが、彼らによれば言語変化（文法化）とはパラメーター変化であると述べている。しかしながら、このようなモデルを仮定すると、あるパラメーターに属する全ての語に急激な変化をもたらすことになるが、実際の言語変化は漸次的なもので語によって変化の時期が異なるという問題が生じる。このような理論と現象の矛盾について、これまでさほど議論されてきていない。

本シンポジウムでは、各講師が専門とする領域を皮切りに、理論と現象のはざまで、生成文法を用いて言語変化に説明を与える可能性を示したい。具体的には、二重限定の消失、同族目的語と軽動詞構文の構文化、削除構文における法助動詞の史的発達などを扱う。

（文責：茨木正志郎）

二重限定の消失と限定詞の文法化について

茨木正志郎

現代以前の英語において、二重限定とよばれる所有代名詞と指示詞・定冠詞が同一名詞句内に共起する事例が観察され、このような用法は古英語、中英語、近代英語の多くのテキストで観察されることから、運用上の誤用である可能性はほとんど無いように思われる。二重限定は現代英語では観察されないので英語史のある時点で消失したと考えられるが、これまで文法化の観点からあまり議論されてこなかった。

本発表では、現代英語で同じ限定詞に属する所有代名詞と指示詞・定冠詞が英語史において D 要素へと発達し、その結果、同じ位置を競合するようになったため、二重限定が消失したと主張する。Ibaraki (2009) のコーパス調査に基づいて、現代以前の所有代名詞と指示詞・定冠詞の分布には制約があったことを明らかにし、その上で二重限定の統語分析を行い、中英語以降に起こったそれぞれの文法化の要因とメカニズムについて明らかにする。

同族目的語構文と軽動詞構文における文法化と構造変化

久米 祐介

本発表では、文法化は語彙項目の素性の変化に起因すると仮定し、構文化はそれを構成する語彙項目の素性の変化により新しい構文が形成される過程、あるいはその変化であると主張する。具体的には、様態の同族目的語構文では、中英語まで様態の解釈は同族目的語に動詞から道具の意味役割が付与されることにより生じていたが、中英語以降、動詞は屈折の水平化による与格付与の消失に伴い道具の意味役割も付与しなくなった。これは、動詞の語彙的意味の弱化を意味し、本動詞から軽動詞への文法化であると考えられる。この文法化により、様態の同族目的語構文は動詞句の構

造から叙述構造へと変化した。同様に、have 軽動詞構文では、中英語までは have は事象名詞に対格を付与していたが、近代英語以降に格付与能力を失っている。これは have の語彙的意味の漂白化を意味し、文法化が起きたことを示唆している。この文法化により、have 軽動詞構文は動詞句構造から叙述構造へと変化した。構文化が起きたと結論付けられる。

助動詞後位省略構文と通時的観察と理論的考察

山村 崇斗

通例考えられてきたように、現代英語の法助動詞が古英語で過去現在動詞に分類される一般動詞から文法化したとすれば、文法化が起きる前には助動詞後位省略構文は観察されないことが予測される。しかし、Warner (1993) により、古英語・中英語で既に助動詞後位省略構文が観察されていることが分かっているため、この予測は正しくないようである。古英語から変わらず助動詞後位省略構文が観察される事実の生成統語理論に基づく分析により、これまで考えられてきた英語法助動詞の文法化のシナリオの再解釈を試みる。

本発表では、Warner (1993) の挙げる言語データに加え、史的電子コーパスからの助動詞後位省略構文の事例を考慮し、Rouveret (2012) に基づく、山村 (2016) の古英語の動詞句省略の形態統語分析に沿って分析する。これ通じて、古英語で既に本動詞と助動詞に分化していたという山村 (2016) の主張が支持されることを示す。